

ラテンアメリカの宗教変遷 グローバルゼーションによる40年間の宗教勢力変化

原 稔

序文； ラテンアメリカの宗教変遷研究の前提として世界の宗教人口統計推移を記載する。

図表 I 世界の宗教人口

(単位:百万人)

全人口	1900年		2000年	
	1619	100%	6055	100%
キリスト教徒	558	34.5%	1999	33%
イスラム教徒	200	12.3%	1188	19.6%
ヒンズー教徒	203	12.5%	881	13.4%
仏教徒	127	7.8%	360	5.9%
先住民宗教	117	7.3%	228	3.8%
ユダヤ教徒	12	0.8%	14	0.2%
新興宗教	6	0.4%	102	1.7%
無神論者	3	0.2%	778	12.7%

(出処：世界とラテンアメリカの宗教概観、Franz Damen,Bolivia/Belgica、2006年の世界人口は推定65億人)

現在、世界の人口増加率は年間平均1.2%で全人口の大部分—85%は何らかの宗教をもっているとされる。世界人口の3分の1がキリスト教徒で年間平均

(226)

1.4%ほど増加している。世界人口の5分の1はイスラム教徒で、年間2.1%増加と最も増加率が高い。又、ヒンズー教徒も年間1.7%増加である。

20世紀は宗教勢力の大幅な変化が見られており、全般的にはイスラム教徒が増加し、キリスト教徒は若干減少傾向となっている。

キリスト教の場合、最も世界的な宗教になっているが顕著な内部変化を示している。20世紀初頭、キリスト教徒の3分の1が欧米以外に住んでいたが、21世紀初頭では3分の2が欧米以外の第三世界に住んでいる。いわば、キリスト教は豊かな白人宗教から非白人貧困層宗教に変遷したとも言える。その状況から、キリスト教は本当の意味で多国籍文化宗教に転換したとされる。百年前、全世界がキリスト教徒になると信じられていたが、不測の事態—西ヨーロッパにおける宗教と教育の分離、ロシア、東ヨーロッパにおける共産主義の宗教否定、米国における物質優先主義といった事態で伝統的にキリスト教国家で無神論者が爆発的に増加した。しかしながら、この40年間程で無神論者の数が徐々に減少しているとされる。宗教の世界は同じ宗教の内部分裂のみならず、新興宗教の急激な勃興で、複雑に分断されている。その結果、1万以上の宗教各派が存在するとされるが、ここではキリスト教王国とされるラテンアメリカの宗教勢力変遷を分析する。

1. ラテンアメリカに浸透したカトリック

15世紀末以前のスペインによるラテンアメリカ大陸征服以前の時代は一般的にプレヒスパニック時代と呼ばれている。プレヒスパニックの時代から現代までラテンアメリカ各地の宗教基調は先住民の神々破壊・許容とカトリック教義の混合形態の偶像崇拜であることに基本的な変化はほとんどないと考えられている。アメリカ大陸発見以降、スペイン人は先住民の神殿を多く破壊したが、全部を破壊することは出来ず、中央アメリカに数多く点在するピラミッド群に代表されるように先住民族の具体的な多神教宗教形態を見ることが出来る。

16世紀からキリスト教団—具体的にはカトリック教団が数世紀でラテンアメリカ大陸の布教を行っている。布教の過程でカトリックの教義をそのまま押し

付けた例もあるが、大部分の地域では先住民の土着宗教を土台にして布教をせざるをえなかったとされている。土着宗教では「血の犠牲」を要求するメキシコのマヤ・アステカといった宗教に対しては、「いけにえの儀式」を悪魔の所作と位置づけ、徹底的に神官の殺害や神殿、文献を破壊したが、「生と死」、「愛と憎しみ」や「平和と戦争」といった概念を持つ土着宗教観、習慣や伝統を利用し、新旧「混合」の形でラテンアメリカ各地にカトリックが布教、浸透していった。

代表的なラテンアメリカ・カトリック教としては、スペインから持ち込んだ白人聖母像に加えて、メキシコ発祥のグアダルーベ (Guadalupe) 褐色聖母、アンデスの女神Pachamama等の容認があり、最終的にカトリック法王庁はカトリックの教義内での種々の聖母信仰者もカトリック信者であると容認している。

特にグアダルーベ聖母は19世紀のメキシコのスペインからの独立の旗頭になり、独立後は国家シンボルとしてメキシコのみならず、ラテンアメリカの守護神として信仰の頂点に位置することになる。ラテンアメリカはスペイン、ポルトガルからの独立後、一様に聖母とキリスト像が並存する信仰形態が一般化する。

(グアダルーベ聖母信仰については、拙論「社会現象としてのグアダルーベ聖母寺院巡礼—メキシコにおける宗教的ナショナリズム—『東洋哲学研究所紀要』第17号、2002年1月15日発行を参照)

カトリック信者の間では、Guadalupe聖母、Nuestra Señora Aparecida, Virgen de Regla, Cristo Redentor de Copacabanaといった種々の聖母とキリスト立像が崇拝されているが全てバチカン法王庁から認可されており、それぞれに根本的教義の差は存在していない。ラテンアメリカ征服、植民地時代にカトリック以外の宗教の流入を極力防止した結果でもあるが、宗教の〔混合〕が諸国家にとっても *modus vivendi* (共存形態) となり、ヨーロッパで繰り返された宗教戦争がラテンアメリカでは回避された要因となっている。

このような混合宗教容認形態はNeocristiudad catolica (新カトリック信仰) と呼

(228)

ばれ、歴史上、幾つもの土着宗教との混合、現地布教形態容認を行っており、時代と共に弾力的な布教が成功を取めたとされる。

以下は、ラテンアメリカの宗教分布であるが、キリスト教がラテンアメリカ人口の92.75%と圧倒的な数を誇っているので、以下もキリスト教中心の分析を継続していく。

図表Ⅱ.ラテンアメリカの宗教構成 (単位:百万人)

全人口	1990年		2000年	
	65	100%	519	100%
キリスト教徒	62	95.2%	481	92.75%
イスラム教徒	0.05	0.1%	1.5	0.3%
先住民宗教	2.2	3.5%	1.2	0.3%
ユダヤ教	0.02	0.0%	1.1	0.2%
ヒンズー教	0.1	0.3%	0.7	0.2%
仏教	0.005	0.0%	0.6	0.1%
新興宗教	0	0.0%	0.5	0.1%
精霊崇拜	0.2	0.4%	12	2.3%
無神論	0.4	0.6%	18.7	3.6%

20世紀、世界の人口は3.74倍、ラテンアメリカはほぼ8倍に増加した。その間、キリスト教は支配的宗教として強化されたが、最近では他宗教の増加により独占性を失いつつある。

2. 急激な変化。

1492年のコロンブスによるアメリカ大陸発見以来、ラテンアメリカは新カトリックの王国と信じられているが、この40年間でラテンアメリカの宗教地図が急激に変化している。カトリック以外の諸宗教ではプロテスタントの伸張が目立っているが、イスラム教、東南アジア宗教、及び仏教関係諸派の布教活動も

ラテンアメリカ各地で展開されており、ローマンカトリック教会の絶対的独占を脅かすまでになっている地域も生じている。最近の宗教統計ではグアテマラやチレのカトリック離れが目立ち、メキシコの場合、特に南部のチアパス州では2006年初頭時点で住民の25%強がカトリック以外の信仰に転向していると報道されている。勿論、村ぐるみの改宗（カトリックからプロテスタントへの転向）は女性、子供を含めての虐殺事件まで引き起こしているが、ゲリラ支配地の場合、当局が手を出せない状況が継続している。最近になり、伝統的カトリック信者からの寄付で潤ってきたローマンカトリック教会の一部も、宗教のコントロールを失いつつあることを認め始めている。現状で多くの信者が失われているのは主に農村部におけるプロテスタント宗派の活動によるものであるが、都市部では東洋への関心から仏教各派による布教実態も時折報道されている。ここ数十年間、カトリックは半世紀前までのラテンアメリカの独占的、ダイナミックな宗教としての役割を果たすことが困難な状況になっている。

3. 神と人間の仲介者としての役割から営利傾向

以前のカトリック教会は土着宗教に関する限り、シャーマンやその他土着宗教の祭司との一方的勝利を続けてきた。しかしながら、現在の多くの宗教は企業形態に類似した組織を持ち、人的、資金面でもカトリックに対抗出来る多くの手段を備えている。プロテスタント等、宗派によっては何百万人もの新規信者を獲得しており、逆にカトリックにとってはその数字分だけ信者を失っていくことになる。この新興宗派拡大はラテンアメリカの歴史上、全く新しい出来事である。例としてあげられるのが宗教用品である。1950年代までの宗教財消費者の大部分はカトリック信者によるものであったが、現在では宗派毎の財が販売されている。つまり宗教用品市場も多様化し、経済発展と並行してこの市場も業者にとって魅力的に発展・拡大している。メキシコの場合、宗教団体が独自の土地、建物を所有出来る法律が発布されて以来、諸外国からの宗教団体の登録が増加し、土地購入、その上に寺院建築を繰り返していく、いわば、宗教が不動産投資という経済活動と結びつき、資金獲得を目的に、或いはバック

(230)

に更なる布教を行うという営利を重視した宗派の活動が伸びていることも注目される。

(メキシコの宗教団体の不動産取得許可に関しては、拙論「メキシコ合衆国憲法及び関連法規によって規定された祭司の義務」、『東洋哲学研究所紀要』第20号、2004年12月20日発行を参照)

4. 社会学的解釈

宗教の変遷に関して、社会学的には、産業、政治、及び科学の3つの革命、改革要素が研究されるが、ここではプロテスタントを中心にした実際の宗教勢力の変化を見ることにしたい。18世紀から19世紀のヨーロッパでは産業革命から派生したストライキ、選挙、大衆による抗議等の意識変化による社会、及び精神構造の変化が生まれている。ラテンアメリカにおけるプロテスタント各派の布教は19世紀後半から本格化したとされる。当初はヨーロッパ移民による定住地での自主的な布教が中心であったが、20世紀初頭から米国のプロテスタント各派による布教が積極化している。特に、ラテンアメリカでは1960年から70年代に宗教と教育の分離が叫ばれ、同時に教権からの解放という教会離れや失望が大衆の意識に生まれている。そのような地盤の上に特に中米では米国からの福音派（エバンジェリカル）がプロテスタント各派の中心をなしている。ラテンアメリカでは「エバンヘリコ（エバンジェリカルのスペイン語読み）」は福音派だけではなくプロテスタントの総称となっている。又、1930年代に米国で生まれ霊的な再生体験を標榜するペンテコステ派（聖霊降誕を意味する）の布教が開始され、各地に幾多の教会を建設して、信者数を拡大している。更に、仏教や東洋系の各派も目立たないが徐々に信者数を増加させているとされる。これら新興宗教群や従来のローマンカトリックへの反発として、プレヒスパニック、アフロアメリカ、その他の外来宗教への回帰運動も主に学生が研究課題としている場合もある。

ラテンアメリカの宗教状況の特徴として、先住民や貧困層の間で村ぐるみ、家族ぐるみのプロテスタントへの改宗が目立っている。人口の都市集中、つま

り農村部の伝統的な家族の絆、集団行動が分裂、或いは崩壊している中で、先住民や貧困層は社会的な恩恵や庇護を受けることが難しく、他国への出稼ぎ、所属可能な組織で人間的な絆を求めて魅力的な宗教に救済を求める傾向が増大している。巨大化のゆえに教会の権威主義から脱却出来ないと言われるカトリックは一部裕福層の冠婚葬祭行事が中心となり、本来の役目である貧困層への救済対応がなおざりにされているとの自己反省がようやく聞かれるようになったが、信者数減少防止の具体的な成果は見られていない。

プロテスタント各派は現場での自由な指揮を任されており、聖書や説教も先住民言語に翻訳し、独自のラジオ、テレビ局まで活用している。特に霊的な降臨体験を重視する教えはリーダーのカリスマ性も加味され、現地語による対話形式はより直接的な精神的な安心感や希望を与えているといわれる。又、通常、プロテスタント各派は、貧困層、麻薬患者、アルコール、タバコ中毒者、身寄りの無い年配者への食事や憩いの場提供といった具体的な慈善事業を行っている。カトリック教会でも同類の対応をしているが、霊的な体験を進めるプロテスタントにより多くの魅力を感じる青年層も多い。

5. 各派宗教勢力とその発展

ラテンアメリカ各地でカトリックの勢力が減少しているとは言え、過去500年間の独立、革命、近代化に果たした役割は大きい。各国の精神的な支柱はカトリックであり、ほとんどの国では国教待遇を受け、実質的にカトリック以外の信仰の自由は19世紀末までなかった。その後、一部のカトリック神父が19世紀末頃から国教となったカトリックから自由主義を標榜することになる。カトリックが最も強力な時代はピオ 12世（1939-1958在位）の在位時期でラテンアメリカの司教区はそれまでの168から436教区に増加した。1958年には法王庁内にラテンアメリカ教皇委員会が設置されラテンアメリカ22カ国との外交関係が樹立され、民衆宗教としての地位を確立する。ラテンアメリカ諸国中、最後にメキシコは1992年にバチカン法王庁と外交関係を樹立し、各国にバチカン大使館が設置されている。1950年代まではカトリック以外の宗教表現は実質的に不可能

(232)

な時期であったが、政治的に自由主義が拡散されるにつれて新規宗教の流入への寛容も生じている。更に、1959年のキューバ革命、1961年のマルクス主義運動、経済や政治の変革の影響が教育面にも反映し、カトリック教育の廃止といった要因が新規宗教の自由な流入をもたらした。

図表Ⅲ. ラテンアメリカにおけるキリスト教諸派勢力

全人口	1990年		2000年	
	65	100%	519	100%
キリスト教徒	62	95.2%	481	92.75%
カトリック	59	90.1%	461	88.8%
プロテスタント	0.9	1.4%	46	9.3%
英国国教	0.7	1.1%	1	0.2%
東方正教	0.7	1.1%	0.5	0.1%
独立教会	0.03	0.1%	39	7.7%
キリスト教少数派	0.003	0.00%	6	1.3%
福音派	0.7	1.2%	40.3	7.8%
ペンテコステ派	0.01	0.0%	11	27%
二重信仰者	0.3	0.4%	80	15.5%

(キリスト教は大きく6つに分類される。4つは伝統的キリスト教で(1)カトリック、(2)プロテスタント、(3)東方正教、(4)英国国教で、少数派は(1)モルモン教と(2)エホバの証人、独立教会の多くは非白人の先住民教会を意味している。ラテンアメリカのキリスト教徒の特徴として同時に二つの宗教団体に所属する傾向が強い。世界の二重信仰平均は5%で、ラテンアメリカではその3倍の15%となっている。)

6. プロテスタント宗教勢力の拡大

1950年代以降のラテンアメリカの宗教変遷を見るには可能な限り正確な数値をつかむことが重要である。メキシコの場合、1992年以降に内務省宗教庁が宗教学法人の登録を開始しているが、カトリックを含めて2,000以上の登録件数とな

っている。宗教団体リストは政治的に有用であるが社会学者にとってはそれほど価値を持たない。関心があるのは、どこにどの宗派が存在しているのかという地理的、経済的要素であろう。ラテンアメリカ各国では、宗教団体の住所登録を義務にしているため、その観点からの国勢調査で各宗教分布が把握できる。キリスト教の場合、カトリック以外を一様にアングロサクソン用語のプロテスタントとしてひとくくりしているが、プロテスタント各派では、モルモン教、エホバの証人、7日目再臨派等はプロテスタントに所属していないと理解している。又、無宗教という調査での返答があるが、自己の宗教を表明することで生じるトラブル回避の為に無宗教と答える場合も多い。各宗教団体も独自の内部信者数データを持っているが、現地から教団本部への報告と実態が大きく異なる場合もあり、表面上の宗教勢力を理解するためには公的機関や報道機関による統計を基本にするのが客観的見解であろう。

図表Ⅳ. 1960年と1985年のラテンアメリカ諸国の人口に比較したプロテスタント信者比率

国名	1960年	1985年	
	プロテスタント%	プロテスタント%	少数宗派%
アルゼンチン	2.1	5.5	1.1
バハマ諸島	n.a	56.4	1.1
バルバドス	n.a	59.3	2.5
ベリーゼ	n.a	25.8	2.0
ボリビア	1.0	7.6	0.7
ブラジル	7.8	17.4	0.5
チリ	10.8	22.5	2.0
コロンビア	0.7	0.1	1.1
コスタリカ	4.3	7.7	2.2
キューバ	3.2	2.4	ごく少数

(234)

ドミニカ	1.5	6.4	0.6
エクアドル	0.3	0.4	0.9
エルサルバドル	2.2	14.0	1.2
仏領ギアナ	1.2	6.5	1.7
グアテマラ	3.0	20.4	0.7
ギアナ	ごく少数	28.0	1.8
ハイチ	10.4	17.4	0.6
ホンジュラス	1.5	9.9	0.7
ジャマイカ	ごく少数	38.6	5.0
メキシコ	1.9	4.0	1.0
ニカラグア	4.5	9.3	2.1
パナマ	7.6	11.8	1.0
パラグアイ	0.7	4.0	0.3
ペルー	0.7	3.6	0.9
プエルトリコ	6.9	27.2	2.7
スリナム	9.7	19.9	1.0
ウルグアイ	1.6	3.1	2.2
ベネズエラ	0.7	2.6	0.7

出処：1960年度DataはChristianity Today, vol. VII. No. 21 July 19, 1963, p. 8 for 1985 by P. J. Johnstone, Operation World, 1986, 40 ed. Bomley, Kent, England, STL Books and Wec International, pp. 55. 62

上記の表から、1960年ではチリ、ハイチ、ブラジル、パナマとプエルトリコの5カ国のプロテスタント人口は全体の5%強、その後、多くの国々で様々な比率でプロテスタント人口が増加している。ボリビア、ドミニカ、グアテマラは10%前後、パナマ、ブラジル、エルサルバドル、ハイチ、ホンジュラス、ニカラグアは10%以上、チリ、グアテマラ、プエルトリコは20%以上である。5%以下は、アルゼンチン、ペルー、メキシコ、エクアドル、ウルグアイ、ベネズ

エラ、パラグアイ、コロンビア、キューバである。20世紀初頭のカトリック勢力はいずれの諸国も95-98%であったが、1980年代末には80%前後に減少したと見られている。上記の表とは別個にプロテスタント側の統計では、ブラジルは20%、グアテマラ、チリ、プエルトリコ、ハイチは25%以上と発表している。ブラジルではペンテコステ派がローマカトリックよりも信者数が多いとも言われているが、その他の宗教（Krishna, Moon、統一教会、その他東洋系宗教）データは発表されていない。

メキシコの場合、1980年の統計庁（INEGI）国勢調査でのプロテスタント全国平均は人口の3.7%、米国との北部国教地域では5%、南部の先住民が多い地域（Tabasco, Yucatan, Quintana Roo, Chiapas, Oaxaca 各州では8から12%であったが、1990年の統計ではプロテスタント勢力の増加は緩慢で、Chiapas州のカトリック勢力67.6%を別にして Aguascalientes, Guanajuato, Colima, Queretaro, Zacatecas, Michoacan 各州では95%前後を堅持している。プロテスタントの都市部の浸透はメキシコシティが3.1%、全国の都市での平均は4.9%と低く、農村部への布教増加傾向が見られる。次の項では都市部と農村部の布教状況を見る。

7. 都市部の布教

ラテンアメリカを代表する大都市、Santiago（チリ）、Mexico City（メキシコ）、Rio de Janeiro（ブラジル）とMontevideo（ウルグアイ）での布教状況の調査がある。1987年調査ではSantiago市内の教会数は1,618で1151（71.3%）がプロテスタント、467（28.7%）がカトリックである。カトリック教会は一様に大寺院であるが、ペンテコステ派は小規模教会である。しかしながら、1974年に完成したペンテコステ派教会の大きさは同市のカトリック総本山に匹敵する。また、この宗派は古い映画館を買い取り教会に改造することでも知られている。4つの伝統的カトリックはほとんどが中流階層以上の住居地に建設されているが少数派のエホバの証人寺院は貧民街に位置している場合も見られる。

Mexico Cityは2千万人が暮らす巨大都市で周辺都市の人口集中が顕著で64%が周辺都市に暮らしている。周辺都市には幾多の貧民街があり、カトリック以

(236)

外の宗教団体が活発に勧誘活動を行っている。

Rio de Janeiroでは1990年から1992年の短期間で991もの新規宗教団体が登録された。この登録の内、福音派が63%で、ペンテコステ派の寺院は貧困層地域を中心に設置されている。

ウルグアイの首都Montevideoは人口2百万人程の都市である。1970年代から宗教行事が盛んになり、1970年から1985年には641もの新規宗教団体の登録がなされている。その内、407が先住民宗教（カトリックと同義語の場合もある）、101がプロテスタント、26がモルモン教、12がエホバの証人、12がその他となっている。同首都の場合、各宗派ともに各寺院での年中祭事での勧誘が中心活動となっている。いずこの国でも大都市の貧民街は地方の農村からの移民が多く、社会的な庇護を受けることが困難なことから精神的な救済を求める需要が多い地域となっている。

8. 貧困地域布教の事例

ラテンアメリカ都市部の宗教勢力変化は、農村部、特に一様に貧困地域とみなされている先住民居住地に影響を及ぼしている。顕著な例としてはメキシコ南部のチアパス州で1994年1月に武装蜂起した国家解放サパティスタ軍（略称EZLN）支配下の宗教事情変化がある。元々、1990年の国勢調査でもカトリック信者が最も少ない地域で、あらゆる宗派が活発に活動している。同州111の市町村の25%が非ローマンカトリックで、プロテスタント勢力が圧倒的であるが、そうなる以前は女・子供を含めての村ぐるみの改宗による迫害、殺戮の悲劇を幾多の村々が経験している。（詳細は後述）

幾つかの市町村で、プロテスタントが急激に多くの信者数を獲得したのは欧米企業との協調があり、雇用、或いは何らかの社会奉仕事業を伴って、経済効果を示唆しつつ勧誘し、その町の市民の多くがプロテスタントに改宗、或いは好意的になっている事例もある。

9. プロテスタント拡大の理由

前述の如く、この40年間のラテンアメリカ宗教地図はプロテスタント増大の新しい勢力地図に書き換えられつつある。同時にそれはカトリック教会の勢力減少であり、各地域でそれまでの伝統、習慣や思想の変化をもたらしている。確固とした上下組織や神学を重んじるカトリック社会では国家体制も保守的になり、左派傾向の政治体制になる事例が多い。これはアメリカ大陸全体の自由貿易や監視を重視する米国からみれば反米感情に結びつくリスクにもなりえない。米国と同じ精神土壌を作るには宗教もプロテスタントにしたい要望が生じるであろう。その意味からプロテスタントの増加は米国にとって歓迎する事項とみなされる。又、歴史的な解釈としてラテンアメリカのプロテスタントの増加はアングロサクソン民族の使命としている意見もある。ヨーロッパから米国に新天地を求めたのと同様に現在、欧米以外の第三世界にプロテスタントの3分の2が住んでおり、特に福音派、ペンテコステ派拡大は第二のアメリカへの布教拡大というアングロサクソンの願望の実現と見る分析もある。しかしながら、より客観的には第二次世界大戦後、国際間のグローバルゼーションや多国籍企業の多様化が進展し、自由な人の移動がそれぞれの宗教運動を活発化し、更に1980年代からのインターネット時代到来が事実上、国家間の国境をなくしており、自由に宗教の研究が出来る時代が影響していると見られる。更に大量輸送による観光、自由な留学制度等、何らかの宗教を知る、或いはマスメディア経由での布教する機会の自由が各自に受け入れやすい宗教の選択を可能にしている。

又、以下の経済的、政治的、及び宗教的理由からのプロテスタント拡大の説明もされている。

(1) 経済的理由：1930年から1960年代、ラテンアメリカは輸入代替産業の成長と国内市場拡大により急速な工業化が行われた。そして、1960年代以降は国際的な投資による市場国際化、つまり、市場開放が行われ、人口増加と共に成長の影に存在せざるを得ない富の不公平分配による貧困層の顕在化も生じた。

(238)

貿易の自由化は、輸入増加傾向に拍車をかけ、恩恵を受ける都市部と農村部の差—経済繁栄と貧困拡大をもたらした。メキシコの場合、1940年代の人口は2千万人、1987年統計で8千万人、2006年初頭では1億1千万人でその内、2千万人がメキシコシティとその周辺に暮らしている。大都市周辺には例外なく貧民街も形成され、貧困層が求める新しい救済象徴の何らかの財が必要となり、現世主義重視の財を紹介する教会数の増加につながっている。更に欧米の企業進出がプロテスタント教会を支援していることも経済的理由に列記される。

(2) 政治的理由：ラテンアメリカのほとんどの国では、カトリックが国教になっていない場合でも、政府は同様の扱いで、公的宗教行事の認可、及び支援を行っている。多くの労働者を雇用する外資系企業は、欧米からの投資が多く多額納税者であり、プロテスタントを支援している場合が多い。いずれの国でも左派政党はカトリック、中立、或いは右派政党はプロテスタント寄りという傾向がある。宗教が政治に利用されているという事実には双方共に差はないが、特定の政党と密着した場合には対立候補を支持する反対勢力に対して強硬な弾圧手段で悲劇を生んだ事例もある。

(3) 宗教的理由：カトリックがラテンアメリカの主要、主導宗教であることは過去、現在も変化はしていないが、カトリック内部からの改革運動として「解放の神学」があり、その左派思想はニカラグアのサンディニスタ武力蜂起の精神的指針に変化する事例もあった。穏健派も「民衆教会」と称する「対話の場」としての位置づけ運動もあったが、ほとんどのカトリック教会では従来の「神学中心」—神父の説教の場に戻っている。又、カトリックはバチカン法王庁との外交関係を復活し、ローマ法王の訪問で信者獲得回復に努力しているが、勧誘や会合数ではプロテスタントやペンテコステ派が多く、宗教団体リーダーや支援者層により信者数の拡大や減少が左右されている。

10.先住民地域の宗教変化

ラテンアメリカは全般的にカトリック布教が達成されたとされているが、実際には先住民が多い地域では非カトリック住民が多い。例えば中米のグアテ

マラでの非カトリック数は全体の30%、南米のボリビア、ペルー、エクアドル諸国では10%近くとなっている。こうした地域では先祖伝来のカトリックが定着しておらず、政治的、経済的、或いは宗教的な理由により集団でプロテスタントに改宗しているという事実がある。部族毎の改宗ということで個人の意思による改宗ではない。その意味から、先住民は一般的に独自性が薄く、過去5世紀間で内外の影響を受けつつ集団指導者の判断で宗教を選択してきたとされる。

(メキシコ、チアパス州の事例)

1994年1月初頭、メキシコ南部チアパス州で先住民による独立自治を要求する武装蜂起が勃発し、現在にいたるまでサパティスタ国民解放軍が同地域を支配している。同州人口350万人のうち、25%以上がマヤ族とソケ族で、15歳以上の30%強がスペイン語を理解しない。豊富な天然資源獲得の為に、過去、先住民とスペイン人征服者の子孫間の紛争が絶えない地域でもある。統計庁 (INEGI) の調査で過去30年ほどの宗教推移が理解できる。1970年の調査では人口の91.21%がカトリック、1980年は76.87%、1990年は67.62%、現在では60%を下回り全国で一番の非カトリック地域となっている。非カトリックが増加した過去30年間、何千という改宗者の多くが市町村からCanadasと言われる地域に追いやられ、現在、その地域がサパティスタ解放軍の支配地に変貌している。

(宗教と政治の混合)

先住民共同体では宗教と政治は密着、混合しており、宗教行事は共同体安定の重要な要素になっている。従来、宗教行事は富める者から貧者への施しで共同体の均衡を保つ役割を担っていたが、現在では全般的な消費を促す行事に変化している。先住民によっては観光収入目的もあり、毎月祭りを行う地域も増えている。しかしながら、同時に容易な債務供与も推進され、多くの先住民にとって金銭的、かつ精神的な従属負債を負うことになる。ラテンアメリカではスペインの征服以降も村全体の無償で働く「テキオ」と呼ばれる労働制度が持続されてきた。しかし、経済的な理由で、多くの先住民市町村から、若者が都

(240)

市や米国に出稼ぎしており、送金により生活する婦人、老人、子供の残留が増加している。現在、先住民地域の宗教行事は観光シーズンや選挙運動期間中に頻繁に開催されており、政治的に利用される制度に変貌している。

11.都市部の宗教運動

コロンビアの例を見ると、1985年65.3%の人口が都市部に住んでいたが、1993年には73.82%となるなど、ラテンアメリカ全土で人口の都市集中がみられる。メキシコの人口も1995年から5年間で1千万人の増加で現在は1億人を超えている。メキシコシティは現在、2千万人、Sao Paulo（ブラジル）、Buenos Aires（アルゼンチン）、Lima（ペルー）、Santiago（チリ）及びボリビアの首都も1千万人を越えている。共通していえることは、市の中心部は裕福な「スペイン人の町」、周辺は低所得者層が多い「農民の町」と貧富の差で区別されていることである。概ね、プロテスタントは貧困層への布教で成功を収めている。具体例としてはメキシコの第二の都市グアダハラハラ市に1926年、「世界の光」教会が設立された。ペンテコステ派教会は1910年にチリのValparaisoとSantiagoの間の周辺で建造されたとされるが、同種の宗派は同時期にブラジルの貧民街でも生まれている。大都市は経済的中心だけでなく、政治的な中心でもあり、特定政党の支持により布教の便宜が図られる場合も見られる。カトリックやプロテスタントにも関心を示さない層の中には先住民宗教回帰の行事に関心を持つ者も増えているとされる。具体的な事例としては、メキシコシティ近郊のTeotihuacan遺跡では、毎年3月21日の春分の日には「神々しいエネルギー補充」の為に百万人以上が独特の白い衣装で種々の宗教を混合して参集している。マヤ遺跡のChichen Itzaでも「太陽神」との交差を求めて5万人がピラミッドに参集している。しかし、これらの参拝者は特定の宗派ではないことから、独自の宗派としての登録も、調査も行われていない。

12.宗教政党の発生

過去20年間だけを見ても、ラテンアメリカにおける諸宗教の進展は同時に思

想の分断をもたらし、それが直接的に政治に反映されている。顕著な事例は福音派とペンテコステ派信者は活発な政治運動に参加しており、国により状況は異なるとはいえ、グアテマラ、ベネズエラ、ブラジル、コロンビアやペルーのように大統領選挙まで影響する状況になっている。一般的には地方都市から新宗教信者の支持による宗教政党が結成され市町村議員推薦や応援から始まり、その後に全国的な規模に広がり最終的に大統領選挙に影響する勢力になっているケースもある。ペルーの例では1991年の福音派が支持するフジモリ大統領の当選が世界を驚かせた。当時、ペルーでの福音派の人口は7%にも満たなかったが首都リマの貧困層や地方の先住民の支持でマスコミの予想外の当選となった。フジモリ大統領は貧困層の代表としてEmilio San Roman,宗教界代表としてCarlos Garciaを副大統領に任命し、結果として福音派の勢力増加をもたらしている。それ以上に成功したのはブラジルの福音派の政治参加であり、「変革90」当選者リストから上院、下院議員の半分を占めた。ペルーの場合、1992年の「自己革命」で議会を解散し、1994年の選挙では54人もの福音派候補者が立候補したが、わずか5人ほどの当選しかなく、副大統領に任命された宗教人の政治経験不足が政権維持失敗の原因のひとつとみなされている。ペルーの例とは逆にブラジルでは宗教政党の継続が成功している。

図表V.ラテンアメリカにおける福音派支持政党の発生

国名	政党、政治運動	発足年
アルゼンチン	独立キリスト教運動	1991
	独立改革運動	1994
ボリビア	ボリビア改革同盟	1992
	奉仕と統合	1995
	真正改革組織	1995
ブラジル	福音派同盟	1986
	急進福音運動	1990

	第一次全国福音集会	1990
コロンビア	全国キリスト教同盟	1980
	全国キリスト教党	1989
	キリスト教同盟運動	1990
	民間キリスト教約定C 4	1990
チリ	全国キリスト教同盟	1996
グアテマラ	真正国家主義中央政党	1980
	福音政党国際基督教同盟	1993
メキシコ	Lerdo de Tejada同盟	1992
	全国改革戦線	1996
ニカラグア	全国正義政党	1992
	キリスト政党運動	1992
	ニカラグアキリスト道	1996
ペルー	福音戦線	1980
	改革行動運動	1985
	ペルー福音改革同盟	1990
	キリスト出現	1994
エルサルバドル	全国連帯運動	1993
	団結運動	1993
ベネズエラ	真正改革組織	1987

上記政党、政治運動はいずれも米国で見られるような非カトリックから脱却したプロテスタント諸派—福音派とペンテコステ派を中心とする「諸派合同」政党である。なお、回教や東洋の宗教、仏教各派による政治運動はほとんど報道されてもいないし、研究もされていない。これは信者数がキリスト教に比較して極めてわずかであり、キリスト教に対抗する勢力になっていないことによる。

ラテンアメリカ全地域で宗教、信仰の自由が憲法で保証されており、あらゆる

る宗教の布教は自由、かつ登録制度になっているが、非キリスト宗教は現状ではキリスト教団にとってそれほど重大な懸念材料になっていない。

13. 結論

ラテンアメリカ地域では自由主義の台頭に伴い20世紀にカトリックの再編成が開始された。特に過去40年間にグローバルゼーション、観光推進、貿易の自由化、インターネットの普及等、主に経済、政治的な要素から宗教勢力の変遷が調査される状況になっている。新興勢力の増加は貧困層への布教成果とされているが、貧困自体を払拭するまでにはいたっていない。政治、経済力はカトリックを支持する白人層に集中しており、その不満から貧困層、或いは青年層が新たな精神の救済手段として非カトリック信仰に入る事例も多い。更に、新興宗教の大部分は「精霊降誕経験」といった信仰体験を重視する教義も魅力的な要素になっている。又、集団による非カトリック信仰は経済的、政治的な共同体防衛手段となっていることがあげられる。これまでのカトリック信仰では政治に参加する機会がなかった貧困、中間層が非カトリック信仰により政治に参加出来る状況もプロテスタントへの改宗の動機になっている。いずれにしてもカトリックからの脱却はこれまでの社会体制を思想面から分断することになり、より複雑な「モザイク国家」の発生原因とされている。各国の政治指導者層の宗教観により、親米、或いはその逆の反米主義が濃厚にでていることで更に複雑な経済、政治関係が生じ、それが宗教情勢に新たな影響を与えると言う逡巡を繰り返している場合もある。現状、ラテンアメリカの宗教事情は歴史上かつてない幾多の宗教組織の発生をもたらし、カトリックが数的には未だに主流とは言え、思想や体制統一の役割は終了している。特に過去40年間、「静かなる宗教戦争」が継続しており伝統、教義自体から政治、経済に影響される信者獲得競争に変化している。現在のラテンアメリカにあらゆる宗派が活動していると言うことは、仏教、その他の東洋系宗教も実質的に、カトリックや非カトリックと同じ土台で布教できるということである。結論としては、ラテンアメリカ諸国の大部分では憲法で政教分離原則や信仰の自由が保証されているとはいえ、

(244)

今後、豊富な経済力で教会数を増やす組織、及び各国での政治支援を得た宗教組織が急速に拡大していく傾向が継続すると推測される。

参考文献

La mutacion religiosa de America Latina, by Jean-Pierre Bastian, Fondo de Cultura Economica, Mexico, 2003 (ラテンアメリカにおける宗教変遷、著者Jean-Pierre Bastian, 2003)

INEGI, Mexico メキシコ合衆国統計庁資料 (2000-2005)

メキシコの概要

国名：メキシコ合衆国 (Estados Unidos Mexicanos)

面積：1,972,550km² (日本の約5.3倍、米国テキサス州の3倍弱)

国境の長さ：対米国 3,326km、対グアテマラ 962km、対ベリーズ 250km

人口：約1億630万人 (2006年6月推定統計) 人口増加率：2.5% [2000-2005]

平均寿命：男性70.4歳、女性76.4歳、人口の半分強が24歳以下の青年層。混血 (Mestizos) 60%、先住民 (Amerindios) 30%、ヨーロッパ系9%、その他1%。文盲率 [2005年統計で8.1%]

産業別人口構成：第一次産業・21.0%、第二次産業・24.7%、第三次産業・54.3%

公用語：スペイン語、他に、マヤ語、ナウアトル、サポテコ語等の53の先住民言語が話されている。

政治体制：立憲民主主義、三権分立に基づく連邦共和制。31州、1連邦区 (メキシコ市)。

大統領選出政党：大統領の任期は6年間、絶対再選禁止。万年与党と呼ばれたPRI (制度的革命党) に代わり2000年12月1日より初めてPAN (国民行動党、中道右派) 選出の元グアナファト州知事のVicente Fox Quesadaが大統領に当選、2006年7月2日の選挙で引き続きPAN 選出Felipe Calderon Hinojosaが大統領に当選、2006年12月1日から、2012年11月末までが任期。

国会議員任期：上院議員128名任期6年、下院議員500名任期3年。

宗教 (2005年度推定)：カトリック・88.60%、プロテスタント・6.2%、無所属・3.0%、その他の宗教・2.10%、ユダヤ人・0.1%。全ての宗教団体は内務省に登録義務があり、不動産所有が認められる。

電圧：120V, 60Hz (全国共通)、一人当たり電力消費：2.228kw/時間

通貨単位：Peso mexicano (\$表示)

国民一人当たり所得 (2006年)：US\$6,627.00 GDP (2005年) 6,567億ドル

ラテンアメリカの宗教変遷グローバルゼーションによる40年間の宗教勢力変化 (245)

対外公的債務残高(2006年)：1,580億ドル 外貨準備高〔2006年8月〕730億ドル
完全失業率(2005年推定統計)：2.80% 地方、及び時期による失業率の格差が激しい。

為替管理：為替管理はなく、1994年12月20日以降、為替は自由変動相場になっているが、メキシコ中央銀行は外貨準備高の増加に応じて定期的にドル売りを行い大幅なペソ下落を支えている。個人、法人共にメキシコ、及び海外の銀行にドル口座を開設出来る。日本円等諸外貨交換自由。

主な輸出品：輸送機械、機器(33.3%)、電子機器(10.7%)、石油製品(8.9%)、農産物(3.3%)

主要輸出国：米国(88.7%)、EU(3.9%)、カナダ(2.0%)、日本(0.8%)、日本へは肉類など第一次産品が多い。

主な輸入品：中間財、資本財、消費財、日本からは自動車部品、電子部品、医療器械等が多い。

主要輸入国：米国(73.1%)、日本(3.7%)、ドイツ(3.6%)、カナダ(2.3%)、イタリア(1.2%)、中国(1.1%)

(はらみのる・委嘱研究員)

Latin America's Religious Transformation : Religious Power Shift since 1960 and the Role of Globalization

Minoru Hara

My interest in this subject stems from the desire to inform Japanese audiences about the contemporary religious climate in Latin America. Using mathematical data I analyze the growing influence of Protestantism in Latin America, where religious life in Latin America has been dominated by the Roman Catholic Church for most of the past five centuries. While it is possible that this dominance will continue into the future, recent decades have seen dramatic changes in the religious “map” of Latin America. The period 1960-1970 was especially important, as it saw the spiritual liberalization (“liberalization from” means believers being less influenced by church authority) within the church, the secularization of education, as well as the advance of modern technological development and expansion of trade and other forms of economic exchange. The impact of globalization has been most felt by Protestant denominations [as these have opened up new opportunities for proselytizing, which in turn has generated counter reactions]. But these impacts can also be seen on a smaller scale among the Buddhist and other non-Western religious groups that have attracted the interest and alarm of the Catholic Church. Some mention is made of indigenous religious practices, but detailed discussion has been omitted to focus on the dramatic expansion of Protestantism.